

幼い頃は、ある一人の友人とばかり遊んでいた。友人の家の裏手には雑木林が広がっていて、毎日のようにそこで遊んでいた。疲れて林から帰ってみれば、友人の祖父が必ず出迎えてくれて、麦茶やお菓子も出してくれた。その家に入り浸っていたこともあって、私は友人の祖父のことを自分の祖父のように思っていたし、向こうもまた、私のことを本当の孫のように扱ってくれていた。以降はあの頃のように、「お爺ちゃん」と呼んでみる。

その日、友人と林へ向かうと、お爺ちゃんが縁側で日向ぼっこをしているのが見えた。その足元には、白っぽい野良猫が寝転がっていた。恐らくそれは白猫であるはずだが、土埃で全身が茶色に汚れているのだ。飼っていないければ名前も無いが、この家の近くでよく見かける。私たちには見向きもしないのだが、なぜだかお爺ちゃんにだけはよく懐いていた。お爺ちゃんに手を振りつつ林へと駆けていくと、お爺ちゃんは、

「おう、氣い付けろよ」

と叫んだ。私たちは適当に返事をして林に向かった。四月だというのに、陽射しの強い日だった。友人は

秘密基地で遊ぼうと言った。秘密基地といっても、張り出した木の根と土とで出来た、小さな空間でしかないのだが。それでも、雑木林の木々は長らく放置されたものばかりで、木陰なんてものはそれこそ秘密基地以外には殆ど無かった。その日はそこでしりとりをしたり、その直上の木に登ってみたりするだけで、いつものように駆け回ることにはなかった。

ひとしきり遊んで、秘密基地の中で休憩していると、空が赤く熟れ始めたことに気が付いた。妙にキーのずれた時報も遠くから響いてきた。息の上がった顔をお互いに見合った。

「そろそろ帰ろっか」

先に口を開いたのは友人だった。私たちが秘密基地を出て、帰路をゆっくり歩き出すと、友人はいきなり「に」

とだけ言った。

「さっきの続き。『に』からだよ」

私は思わず笑ったが、友人は何がおかしかったのか分からないようだった。

やがて地面は乾いた土ばかりになり、気付けば林を出ていた。お爺ちゃんはずっと縁側にいたようで、私たちに「おう」とだけ呼びかけてきた。あの猫もお爺ちゃんの足元で丸くなっていた。私たちが庭に駆け込

むと、お爺ちゃんは立ち上がった。

「喉乾いたつ。ほれ、来い」

言い終わると、さっさと中へ引っ込んでいつてしまった。すると猫もゆつくりと起き上がり、お爺ちゃんの背中を見つめたかと思えばどこかへと去っていつてしまった。私がお爺ちゃんに邪魔すると、

「おう、上がれえ」

と言う大きな声が右耳を引つ叩いた。そちらを見ると居間が広がっていた。お爺ちゃんは二つのガラスコップを持って、奥の部屋から出てきた所であった。お爺ちゃんはいくたびれたふうには腰を下ろした。出されたコップの中にはなみなみと麦茶が注がれていた。既に結露していて冷たかった。

「かーつ、夏だなこりや。いっぱい飲んどけ」

私たちがちやぶ台の側に座ると、お爺ちゃんは胡座を組み直して話し始める。これもいつものことだった。お爺ちゃんは、林で何してきた、だとか、イノシシはいたか、だとか、色々と訊ねてくる。その割には、答えてもすぐに関係のない話をしだしてしまうのだが。そうこうしているうちに、お爺ちゃんは目を見開いて膝を叩いた。

「そうだ、樽屋の婆さんがよ。文旦、持ってきたんだ。食うか？」

私たちはすぐに頷いた。文旦が何かは分からなかった

だが、この言い方の時はきまって果物であった。

「うし、じゃあ切ってくるから待ってろ」

お爺ちゃんはその言って、奥の台所へ引っ込んでしまった。戸を閉めるときのお爺ちゃんの横顔が少し明るく見えた。

ほどなくして、くぐもった声で会話が聞こえた。

「あれ、あの子ら来てんのかい？」

「文旦、出すべと思ってよ。ほれ、樽屋の婆さんが持ってきた」

「文旦だつて、樽屋がそんな良いモンくれる訳ねえべよ。ほら匂いが、もう苦いでねえか。八朔だよそらあ」それはお婆ちゃんの声だった。二人の会話はいつも少しびりびりしたもののように聞こえる。

「いいんだ、そんなん。すぐ出すから、あの子らと居間で待ってろ」

お爺ちゃんがそう言った直後に、お婆ちゃんは台所から出てきて、ちよこんと私たちの向かいに座った。

「すまんね。爺さんは文旦って言つたろうけど、ありや八朔だよ」

お婆ちゃんは、お爺ちゃんと話すときこそ少し乱暴な口調だが、私たちと話すときはとても柔和であった。

「汗かいて元気だなあ。大丈夫か、イノシシとかに会わなかったか？」

お爺ちゃんと似たようなことを聞いてきて、私は友

人と顔を見合わせて笑った。

すると突然、台所の方からどたつと重い音がした。それから、お爺ちゃんの苦しそうな声がか細く聞こえてきた。すぐにお婆ちゃんは台所へと向かった。戸を開け放った直後、お婆ちゃんのしわくちやの喉がぎゅるりと動いた。

「ああー、ひでえな」

そうとだけ零して奥へ入っていった。私たちも台所の方へ寄つていくと、

「こりやおいねえ。救急呼ぶからな、もうちよつと堪えろ」

とお婆ちゃんが言ったのが聞こえた。心配に思つてはいたが、少なくとも私は、過ぎた好奇心から引き戸の向こうを見てしまった。途端、私は手足が強張つて喉がぐつと絞められたように感じた。友人も唾を飲み込んで、黙ってしまった。お爺ちゃんは台所に転がっていた。右手を強く押さえているようで、その手の平を見てみると真つ赤であつた。まな板の上には、切りかけの八朔と、刃に赤く線が引かれた包丁があつた。

それからの時間の流れは、さながら激流であつた。こんなにもまじまじと救急車を見るのは初めてだつた。空は青黒いのに、庭は夕方が取り残されたように真つ

赤で、サイレンも酷くうるさかつた。やがて私の母親もやつてきて、険しい顔でお婆ちゃんとかを話していた。救急車の囁しさが無くて、きつとその内容を理解することはできなかっただろう。私は赤色灯を見つめたまま、友人の手を力強く握っていた。私の手の甲にも、爪が食い込む感覚があつた。

次の日、私は友人の家を訪れた。遊ぶためではなく、とにかく不安だつたからだ。まだお爺ちゃんの姿は無かつた。友人のことも気掛かりだつたが、わざわざ声を掛けるのも憚られて縁側のそばを右往左往していると、お婆ちゃんが顔を出した。

「あら、来てたんかい。そんなとこいないで、上がんなさいな」

お婆ちゃんは変わらず優しい声でそう言つた。居間に上がると、お婆ちゃんが麦茶を注いでくれた。とても久々のことだつた。

「お爺ちゃん、傷が深かつたらしくて、入院することになったのよ。先生が言うには、少し長引くだろうって」

声色こそいつも通りだが、普通の顔を取り繕っているのがよく分かつた。自分のために無理をしているのがよく分かつた。

縁側をちらりと見ると、あの白っぽい猫がうろつい

ていた。彼もお爺ちゃんを待っているのだろう。私の視線に気付いてか、猫はやがて姿を消した。

「はあ、良い陽気だな。外、あちったっぺ」

お婆ちゃんはやおら立ち上がり、

「八朔、切ってあんだ。上にあの子もいるし、呼んで一緒に食うべ」

と言った。私は静かに頷いた。

友人と一緒に、剥かれた八朔を食べた。酸い香りが強く、とても美味しかった。しかし私も友人も、決して明るいとは言えない表情であった。心配だと零すと友人も力なく頷いて呟いた。

「お見舞い、したいね」

お婆ちゃんは私たちの会話を聞いて、少し考えてから話した。

「んだな……落ち着いたら、一緒にお見舞いに行くべ。それでなくとも、電話でだったら、明日にでもできるよ」

翌日、私は昼頃に友人の家を訪れた。居間に友人とお婆ちゃんが見えた。

「おう、来たかい。そんじや電話すんべえ」

お婆ちゃんがタブレットの画面をたどたどしく押していくと、やがてお爺ちゃんとのテレビ電話が繋がった。

「もしもし。お、元気か」

画面越しのお爺ちゃんは至っていつも通りであった。包帯の巻かれた右手を除けば、全く変わりのない様子で、ひとまず私たちは安堵した。

「いやあ、面目ねえつたら無いね」

お爺ちゃんは恥じらうようにそんなことを言った。

「ねえお爺ちゃん、それ、どれくらいで治るの？」

「そうだなあ。まだ分からんが、俺も元気で戻るからよ」

開豁な口調で答えた。そんなところも変わっていないくて、私は笑みが溢れた。

「そっちの様子が見れんのは嬉しいことだ。明日でも明後日でも、電話してくれて良いからな」

私たちは嬉しくて、気付けばすっかり元気を取り戻していた。電話が終わった後も、持て余した活力のままだに、友人と林へと向かった。

それからは数日ごとに、お爺ちゃんと電話をしていたが、ある日の電話の最中に、お爺ちゃんの部屋に医者が訪れたことがあった。その日は、

「先生がなんか用事だったというから、今日はここまでだな。じゃあまたな」

と言って、通話は切れてしまった。それから電話で話せる日は、次第に減っていった。診療や治療が増え

たらしく、気付けば数週間が過ぎた。その間もずっと、私は友人の家を毎日訪れていた。以前のように林で遊ぶようにもなり、少しずつ、お爺ちゃんが家にいないという現状に適応しつつあった。あの白猫を見ることも、もう一切なくなっていた。

ある日、お婆ちゃんはお爺ちゃんが亡くなったことを教えてくれた。これは後年に聞いたことだが、傷口から雑菌が回って、何某かの感染症に罹ってしまったそうだ。当時の私にはその事実を処理することができなかったのか、聞いた時に涙は出なかった。特段大きな情動も無く、呼ばれた葬儀すらあつという間に終わってしまった。その時に見た友人の顔も、どこか虚ろなものだった。きつと同じだったのだろう。風景は思い出せるが、その時に交わした言葉や聞いた話は全く思い出せなかった。

これらが良くも悪くも思い出となった数年後に、ようやくく悲しさが込み上げてきた。何年も前のことに涙した、その夜ばかりが、今でも鮮明に思い出せるのだ。

友人は昨夜、救急車で運ばれた。

春先の交通事故であった。幸いなことに最悪の事態は免れることができ、数週間から一ヶ月ほどの入院で普通の生活に戻れるそうだった。

私の心臓はそれでも、少し平常でなかった。友人は右手と両の脚に包帯が巻かれていて、寝台から動くことは難しいようだった。

見舞いを持っていった酸っぱい果実は少し重たい。八朔を切るナイフの、その切っ先を見ながら、あんなに昔のことを思い出していた。